

二〇二五年度

二月一日午前入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1から13まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

遠山あおばは小学六年生。同じクラスの榎のママが日本でたったひとりの女性の刀匠であり、刀を作っている小屋の中を見せてくれることになった。あおばはじいちゃんと一緒に榎の家へと向かった。

「刀ってどうやって作るんだろうね。」

「じいちゃんもよくは知らない。いろいろ見せてもらおう。楽しみだ。」

話しているうちに、榎の家のそばの駐車場についた。そこから並んで歩きはじめる。

青い小屋の近くで、じいちゃんが立ち止まった。

「ほお、小さな祠がある。」

ランドセルくらいの大きさの石造りの祠が、竹に囲まれて、道の横にひっそりとたたずんでいた。その前に、野の花が、竹を切っただけの筒に活けられ、供えられている。じいちゃんはしゃがみこみ手を合わせた。ぼくもまねをした。

「ほら、祠の中を見てごらん。刀のもとの塊が入ってる。祀ってるんだな。」

ぼくは中をのぞきこんだ。真っ黒でごつごつしていて、ところどころ銀色に光っている、こぶしくらいの

① 大きさの塊が祠の中に入っていた。

これが刀のもと？

じいちゃんが、祠のまわりにある黒い砂を手を取っている。さらさらと指のすきまから砂が落ちていく。

「砂鉄、みたいだな。」

「砂鉄？ それって、磁石にくっつく砂っていうか、こまかい鉄でしょ？」

「そうだよ。刀は鉄でできてる。」

「あ、そうか……。」

頭の中で、砂鉄やごつごつした岩が点滅しはじめた。

小屋から、全身真っ黒なスタイルの榎のママと、榎がでてきた。

「おや、あれは……。」

じいちゃんの声を無視して、ぼくは二人にあいさつをした。

「こんにちは。」

「いらっしやい。どうぞこちらへ。ちょうど仕事が入ったので、今から包丁だけど実際に打つわね。」

期待で胸がドキツとした。

「は、はい。」

② 返事する声がうわずってしまった。

突然、ぼくのうしろからじいちゃんの声がした。

「胡桃くん、じゃないかな？」

はじかれたように榎のママがじいちゃんをまじまじと見つめた。

「え、遠山先生、どうしてここに？」

榎のママがとても驚いている。

「おお、やっぱり胡桃くんか。久しぶり。もう二十、いや、三十年ぶりかな。なつかしいな。元気そうだね。」

あおばはぼくの孫なんだ。話を聞いて、ぼくも見学させてもらおうと思って、ここへ来たんだけど……。」

「そ、そうなんですか、お孫さん……。」

榎のママがうろたえている。

「え、じいちゃんと榎のママ、知り合いなの？」

ぼくはびっくりしてたずねた。じいちゃんは遠い目をしている。

「じいちゃんが塾の先生のアルバイトをしていたころの、胡桃くんは教え子だ。」

そのころのじいちゃんを想像しようとして、ぼくは完全に失敗した。

「ママ、どんな生徒だった？」

じいちゃんの目が笑ってる。

「そうか、榎ちゃんにはじめて会ったとき、懐かしいなと思ったのは、そのせいだったのか……。榎ちゃんは胡桃くんによく似てる。」

じいちゃんはずき、またあごに手をあてた。

「そうだな、胡桃くんは芯の強い、勢いのある元気な生徒だったな。」

「芯が強い？」

榎が小さな声でつぶやいた。

「そう、胡桃くんは中学生のころ、刀匠になるのが夢だったんだ。でもお家の人が全員、いやちがったな、おばあちゃんはそうじゃなかったけど、こぞって大反対。ぼくは、そんな胡桃くんの相談にのってたんだよ。」

じいちゃんは、榎のママの向こう側を見ている。

「刀匠になるのは無理かなと思っていたけど、そうじゃなかったんだ。」

「無理？」と、榎が不思議そうにたずねた。

「そう。そのころのじいちゃんはそう思っていた。」

じいちゃんは大きなため息をついた。

「でも、ママの実家って、岡山の鍛冶屋さんだよ。ここじゃないよ。師匠って……。」

榎が言い終わらないうちに、じいちゃんが大きな声で笑いはじめた。

「ぼくがまだ若かったころの話だよ。昔、胡桃くんの住んでいた町で塾の先生のアルバイトをしていたんだ。でも、正式に中学の先生になったのは、めぐりめぐって、ここ。ずいぶん回り道をしてきちゃったけどね。」

じいちゃんが昔話するのは珍しかった。

「胡桃くんが刀匠になっていて、こんなに近くて工房をひらいていたとは……。④中学生のころに悩んでいたことを知っている者からすると、とてもうれしいよ。」

じいちゃんうれしそうだ。一方、榎のママはそわそわと恥ずかしそうにしていた。

「先生、そのくらいで……。えっと、こ、こちらにどうぞ。」

早く話をきりあげたいらしい。

榎のママは小屋へとぼくたちを案内した。

小屋の中は黒かった。暗いのもあるけれど、置いてあるものがすべて黒かった。大屋根とその上にある小屋根のすき間から太陽の光が差しこんでいる。光がほこりをキラキラと反射させているのだけれど、そのほこりさえ黒いと感じてしまう。

小屋の中は教室の半分くらいの広さだった。入り口とは反対側の壁際に、一段、腰の高さくらい低くなっ

た畳二枚分ほどのスペースがあり、椰のママはそこに身軽にさっと飛びおりた。

ママは壁を背にして、ぼくたちのほうをむいた。

ママの手前や左右にはいろいろな道具が並び、背後にもずらりと工具がぶらさがっていた。名前はわからないけれど、ペンチのようなもの、いくつものハンマー、たくさんのお棒、アイロン台のようなもの、バケツ、雑巾など。そして、右手側には、ベルトハンマーと呼ばれる大きな四角い機械が存在感たっぷりに置かれていた。黒光りしているそれらの道具は、鍛冶仕事には欠かせないものなのだろう。道具の並べ方にも、きつと決まりがあるにちがいない。

椰のママは、その場にしゃがみ、床に置いてあった大きな袋から何かを取り出した。

「これは炭。そして、わたしの左横にあるのが、火の床と書いて『ほど』っていうところです。今から火をおこします。」

炭に火がつくと、炎のにおいがたちのぼり、それと同時に顔に熱を感じた。

椰のママはぼくたちの正面に立った。

⑤ ママをつつむ周囲の雰囲気がつつと変わった。

本で読んだことがある。剣道の達人が剣を持って相手の前に立つと空気が変わると……。今、空気の透明度が一段ました気がする。椰のママの体から目に見えない「気」が発散されはじめ、体がひとまわり大きくなったように感じた。

さらに「火床」に炭をくべると、パアッと大きな火花があがった。黒くなってしまった壁に炎の色がうつった。炎の色がどんどん変化していく。炎にはこんなにくさんの色が隠されていたのかとびっくりする。顔が火に照らされて熱くなってきた。

「炎の色で温度はわかります。この小屋の中、黒いんですけど、炎の色の変化を見逃さないためにそうしてゐるんです。っていうか、本当は、煤で黒くなっちゃったんですけどね。」

「火床」を見つめながらママが説明してくれた。

⑥ 「火床」の中を棒でかきまぜ、炎の色を注意深く見つめているママ。そのまなざしがとても鋭い。

一本の棒を左手に持つと、椰のママはそれを、グツと「火床」の中にさし入れた。棒の先には、でこぼこして、ところどころ銀色に光っている黒い塊がくっついていて、再び火花が勢いよくあがった。さらに炭がくべられる。紫色、オレンジ色、黄色、レンガ色、そして真っ赤な火花が「火床」の中ではじけた。あまりに高すぎる温度、千百度以上になると、出来上がった刀は、つるつるの鏡のようになってしまいうらしい。炭が勢いよく焼けている。熱といっしょにカランと乾いたにおいが鼻をつく。香ばしいようなにおい。ぼくはそのにおいが好きだと思った。

椰のママの体はどこにも力が入っていないように見える。肩の力が抜けていて、自然体だ。顔を横にむけ、「火床」の中につつこんだ棒の先を見ている。「火床」の炎の色がママの顔を染めている。

「火床」の中につつこんだ棒を動かすたびに盛んに火花があがる。

「線香花火の色が、ひとつの目安です。」

鋭い視線を火床にむけたまま、ママが言った。

線香花火、とぼくはつぶやき、思い浮かべる。黄色がかかったオレンジ色の小さな火の玉。そこから火花が飛び散るけれど、その火の玉の色が重要らしい。

小屋の中がムツとしてくる。見ると、ママの額に汗の粒が浮かんでいた。

ママの体にふっと力が入った。火花を見つめていただけなのに、まるで何か、ぼくには見えない何者かに

呼ばれたみたい……。そしてそれに答えるかのように、^{なき} 椰のママの体にさらに「^き 氣」がこもった。

「^{ほじ} 火床」から棒をすっと取りだすと、右側にある、大きなベルトハンマーの下に棒の先の塊^{かたまり}を置いた。ダダと大きな機械音があがり、塊がたたかれていく。

A そして再びハンマーでたたく。

B 塊をじっと見つめていたママは、ひと呼吸しベルトハンマーの下から棒を取りだした。

C そして右手にハンマーを持つと、ぼくから見て正面にある、アイロン台のようなものの上に棒の先の塊を置いた。そして塊をハンマーでたたき、のびしはじめた。

D 次に、ハンマーをこてに持ちかえると、のびた塊を半分に折る。

固いはずの塊が、まるでゴムのように曲がり、のびていく。赤黒い塊が^{へんげんじざい}変幻自在に形を変えていく。ぼくはわれを忘れて見入っていた。

ハンマーの澄^すんだ音がリズムカルに小屋の中に響^{ひび}く。椰のママは軽々とハンマーを操^{あやつ}っている。

—— かんかんかんかん

ハンマーの音が頭の中でこだまする。聞いたことはないはずなのに、どこかなつかしさを感じる。

そして一気にバケツの水に塊のくっついた棒をつこんだ。ジュワツと大きな音がして、黒く濁^{にご}った泡といっしょに煙^{けむり}がたちのぼった。同時にたき火に水をかけたときの、焦^こげくさいような独特のにおいがあたりに漂^{ただよ}った。

ぼくは、棒の先を見る。さっきまでごつごつとした塊だったものが、金の延べ棒のような直方体になっていた。

再び、火花のあがっている「火床」の中に、棒をグツとさしこんだ。

椰のママは大きく息をはきだし、額の汗^{あせ}をふいた。

⑦ 「これが一連の動きです。この先これを、何回かくり返します。」

「ほお、何回くらい？」と、じいちゃんが質問した。

「刀だと十回くらい、包丁や小刀だと七、八回くらいかな……。」

「そうですか……。」

じいちゃんの落ち着いた声とうらはらに、ぼくは興奮していた。すげえ、すげえと心の中で騒^{さわ}いでいた。何がどうすごいのかちゃんと説明できないけれど、とにかくすごかった。

目の前でくり広げられた作業に、ぼくはすっかり心を奪^{うば}われていた。

大きく息をすった。われに返ったぼくは、じいちゃんが肩^{かた}を押さえてくれていたのに気がついた。

「あおば、身をのりだしすぎだぞ。」

知らないうちに、最初にいた場所からずいぶんと前にでていたみたいだ。

「ふふふ。火にびっくりしたかしら？ 今の子は火を見ることもあまりないから……。それとも音にびっく

りしたのかしら？」

椰のママがふんわりと笑^{わら}った。

「聞いてもいいかな？」

「はい、なんなりと。」

じいちゃんの問いかけに、ママが額の汗をぬぐいながら答える。

「最初、棒の先についていたきらきらした塊^{かたまり}。それは刀の大本、砂鉄から作られる鋼^{はがね}、玉鋼^{たまはがね}と呼ばれるものかな? この小屋の前の祠^{ほこら}に納められていたものと同じなのかな?」と、じいちゃんがたずねた。

「先生、よくご存じで……。土の中にある砂鉄から鋼は作られます。祠の中のは、玉鋼です。とても大切なもので、祀^{まつ}っています。玉鋼は、たたら製鉄という方法で、鋼から適度に不純物をとり除いたものです。日本では島根県の奥出雲^{おくいずも}で製作されているものがあります。そして炭。これは木を燃やしてできます。そして、火と水。ぴかぴか光る刀からは想像できないかもしれないけれど、黒い石くれから刀は作られるんです。」

ぼくは小屋のすみで二つ、三つ重なって置かれている玉鋼に目をやった。

「先生、炎^{ほのお}って、母性なんじゃないかなとこのごろ思うんですよ。」
X。生みだすものって母性っていいですね。」

「火床^{ほど}」から目をあげたママがじいちゃんを見ている。

「鍛冶屋^{かじや}さんの神様って女の神様だと言われているんですよ。島根県にある金屋子神社^{かなやご}に祀^{まつ}られているんですが、女神様だから、女性が刀鍛冶^{かじ}やたら製鉄に入るのをきらうんですって。焼きもちってやつらしいです。それが、いまだに女性の刀匠^{とうしょう}が存在しにくい理由としてあげられているんですけど、笑^{わら}っちゃいませんか?」

この話は椰^{なぎ}も知らなかったようだ。びっくりした椰の横顔が見えた。

「これからしばらく、同じことのくり返しだから、飽^あきたらでいていいわよ。」

ママがぼくたちに言った。

椰のママは「火床」の様子を再びじっと見ている。そして直方体になった玉鋼のついた棒をだしたり差しこんだりしはじめた。そのたびに火花がパアツと大きくあがった。

そして、椰のママの体がまた見えない「気」につつまれはじめた。

ぼくは、一歩さがった。

すごい迫力^{はくりよく}と、熱気だ。

ぼくは盛大^{せうだい}に息をはき、さらにうしろにさがった。まわりを観察する余裕^{よゆう}がでてきた。

あぶないから刀はないのだろうと思ったばくの目が一か所^{かへ}で止まった。

「火床」の上のほう、真^まっ黒にすすけた壁^{かべ}にあるもの。刀の刃^{やいば}の形をしていた。

にぶい色をした刃の部分だけが、くもの巣のはった刀掛け^{かたなか}の上に置かれていた。

でもあの刀掛け、どこかで見たことがあるのだけれど……。

そのとき、道路のわきの標識の絵が頭をよぎった。

そうか、シカ。シカの角だ。ぼくはドキドキしてきた。

椰の腕^{うで}をつつく。

「あれ、刀だよな。」

「そうよ。玉鋼から打ちだしただけの刀。刃の部分、刀身^{とうしん}っていうんだけど、それをかざってるっていうか、置いてあるの。これから、研^といで、磨^{みが}いて、鏝^{※ば}とか、柄^{※つか}をつけるの。でもそれは、別の工程。それらを経て、やっと刀として完成ってことになるのよ。」

椰が説明してくれた。

ぼくはつばを飲みこんだ。

「刀身^{とうしん}っていうんだ。それと、あれ、刀が置いてあるのって、シカの角だよな。」

ひそめているつもりでもだんだん声が大きくなってしまう。

「そう、裏の山から拾ってきたの。春ごろになると落っこちてるのよ。」

椰なぎが笑っている。

「もしかして、椰が拾ったの？」

「ママといっしょにね。」

すごい、すごすぎる。ぼくは握にぎったてのひらが汗あせばむほど興奮していた。

そして気がついた。

全部、自然のものだ。

⑩ たまはかね

ア

からできた玉鋼、

イ

を焼いてできる炭、わきだす水、そして火。さらに、刀をかざるシカ

の角も ウ の中にある。

刀って、自然の中から生まれてきたんだ！

日本の大地が生み出したものだったんだ！

まるで世紀の大発見をしたように、ドキドキが止まらなかった。

また盛大せいだいに「火床ほど」で火の粉があがった。

椰がぼくに外にでようと目で合図をよこした。

ぼくたちは小屋をでた。中からは、ダダダダツというベルトハンマーの音に続いて、かんかんかんという

澄すんだ音が聞こえている。

ぼくは深呼吸をして、汗をぬぐった。

「あんなにすき間だらけなのに……。ドアもなくて、天井と小屋根の間も広くあいてて、風通しがいいはずなのに、中、暑いんだな。ずっと炭が燃えてるからかな。」

ふり返ると、椰がぼくを見ていた。

「ね、どうだった？」

そう聞かれたぼくは、待ってましたとばかりに勢いこんで言う。

「かっこいい。かっこよすぎ。椰のママ、すごいよ。大迫力だいはいくりよくだよ。包丁や刀ってああやってできるんだってわかった。すごい重労働なのに、力がまったく入っていないように見えた。ハンマー持ってかんかんかんって、力いるよ。だってさ、あのハンマー、重たそうだったもん。なのに、軽々とたたいててさ。かんかんかっていう音が、すぐく澄すんで、山にこだましそうだったじゃないか。おまけに刀が鉄と木と水と火だけ、ぜんぶ自然のものからできてるなんて、すごすぎる。」

⑪ ぼくは興奮したまま、思いついたことをしゃべりまくった。

椰の鼻がひくひくと動いている。刀匠とうしょうの仕事にあこがれ、ママのことがとても自慢じまんな椰。刀匠になりたいという椰の気持ち、わかる。

「刀匠、できることなら、ぼくもになりたい。」

調子にのって、つい口がすべってしまった。

「ばっかじゃないの。」

椰が表情を一変させた。

「そんなの、わかってるよ。」

刀匠は椰の夢。ぼくの夢じゃない。

「生やさしいもんじゃないのよ。食べていけないかもしれない。服は真っ黒になるし、穴がすぐあいちやう。」

手の爪つめの中に入った煤すすなんて、いくら洗っても取れないんだから。やけどや切り傷なんてしょっちゅうだし、鼻の穴まで煤だらけ。」

I 「ママにそう言われて、反対されてるんだろ。」
はっとした榎なぞがぼくを見た。

「女の神様の話ができてびっくりした。女の神様って、焼きもち焼くのかね。※わしのことを反対するのって、ママとその女の神様なのかな。」

II 榎なぞが力なく笑う。

III 「でもさ、かっこいいよ。反対されてもやりたいんだろ？ やれるよ。」
榎がまたうなずいた。

「うん。そうだよね。夢は見たもん勝ちだもんね。」

榎には、ぼくにならない夢がある。それなのに、心は落ちこんだり、妙みょうに張りきったり、忙しいいそがい。でも、今の榎の声には力がこもっていた。

(にしがき ようこ『アオナギの巣立つ森では』より)

※(注)

刀匠とうしょう 刀剣とうけん、特に日本刀を作る職人。

鍛冶かじ 金属を鍛錬たんれんして製品を製造すること。この鍛冶によって生計を立てる職人や店を鍛冶屋という。

師匠ししょう 榎はじいちゃんのことを「師匠」と呼んでいる。

工房こうぼう 職人が仕事をするための作業部屋。

鍔つば 刀身とうしんと柄つかの間に装着されている金具。

柄つか 刀剣の手で握る部分にぎ。

わし 榎は普段から自分のことを「わし」と呼んでいる。

問一 ― 線①「これ」とは何を指しますか。文中から過不足なくぬき出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

問二 ― 線②「返事する声がうわずってしまった。」とありますが、なぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 全身真っ黒なスタイルの柳のママと対面し、予想外の展開に緊張でおじけづいてしまったから。
イ 心待ちにしていた刀の作り方をいよいよ見せてもらえることになり、気持ちが高ぶったから。
ウ 包丁を実際に打つところを見せてもらえると聞き、期待と不安が入り混じった気持ちになったから。

エ ただでさえ緊張しているところに、うしろから突然じいちゃんの声がして驚いたから。

問三 ― 線③「遠い目をしている。」とありますが、この部分はじいちゃんは何をしている様子を表現したのですか。解答さんの「様子。」につながるように自分で考えて十字以内で答えなさい。

問四 ― 線④「中学生のころに悩んでいたことを知っている者からすると、とてもうれしいよ。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 柳のママは「中学生のころ」、じいちゃんから見てどのような生徒だったのですか。文中から十五字でぬき出して答えなさい。

2 「中学生のころに悩んでいた」とありますが、柳のママは「中学生のころ」、どのような状況に「悩んでいた」のですか。解答さんの「状況。」につながるように文中の言葉を使って三十五字以内で答えなさい。

問五 ― 線⑤「ママをつつむ周囲の雰囲気がつつと変わった。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 刀作りをはじめる際の緊張感が周囲にも自然と伝わり、近寄りがたくピリピリとした不穏な空気に包まれたということ。

イ 職人として刀作りに集中する姿勢から厳かなオーラが生まれ、周りの空気まで澄んだように感じられたということ。

ウ 刀作りを成功させたいという純粋で一途な気持ちがあふれ、周囲の人もその気持ちを共有して一体感が生まれたこと。

エ 炭に火がつくと同時に神秘的な空気に包まれ、不思議なエネルギーによって実力以上の力があるように感じられたということ。

問六 ——— 線⑥ 「炎の色を注意深く見つけているママ。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「炎の色」で何の変化がわかるのですか。文中から一語でぬき出して答えなさい。

2 ママは「注意深く見つけて」、「炎」が何色に変わるのを待っているのですか。文中から十字前後でぬき出して答えなさい。

問七 文中の で囲われたA～Dの文を正しい順番に並びかえ、その記号を答えなさい。

問八 ——— 線⑦ 「これが一連の動きです。この先これを、何回くり返します。」とありますが、「何回くり返す」といつている「一連の動き」について書かれている部分はどこからはじまっていますか。文中から初めの五字をぬき出して答えなさい。

問九 文中の Xにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア	炎を生みだす鋼 はがね	イ	炭を生みだす炎
ウ	炎を生みだす火	エ	刀を生みだす炎

問十 ——— 線⑧ 「それ」の指し示す内容を解答らんの「こと。」につながらるように、文中の言葉を使って三十五字以上四十字以内で答えなさい。

問十一 ——— 線⑨ 「真っ黒にすすけた壁かべにあるもの。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「真っ黒にすすけた壁」とありますが、この部屋は「すすけた」ままにし、わざと黒くしています。部屋を黒くしているのは何のためですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 刀作りに使用する道具をすぐ取り出せるように、目立たせるため。
イ 恐怖心きょうふしんを抱かせないように、刀を目立たなくさせるため。
ウ 刀を作る際に、炎の色の変化を見逃のがさないようにするため。
エ 余計なものに気をとられず、刀作ることに集中するため。

2 「壁にあるもの」とありますが、この時「ばく」は何に目をとめたのですか。文中から二字でぬき出して答えなさい。

問十二 ―― 線⑩ 「ア からできた玉鋼^{たまはがね}、イ を焼いてできる炭、わきだす水、そして火。さらに、

刀をかざるシカの角も ウ の中にある。」とありますが、 アーウにあてはまる言葉をそれぞれ文中から漢字一字でぬき出して答えなさい。

問十三 ―― 線⑪ 「^{なまき} 椰の鼻がひくひくと動いている。」とありますが、この時の椰についての説明としてあてはまらないものを次のア―エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア あおばが刀の製法に感動してくれたことが伝わり、刀匠^{とうしょう}の魅力を改めて実感している。
イ あおばが興奮して立て続けに話す様子に呼応するかのように、気持ちが高ぶっている。
ウ あおばが刀匠の仕事に関心を持ったと知り、自分の夢を取られたくないと思っている。
エ あおばが刀匠であるママを称賛^{しょうさん}してくれたことが嬉しく、ママを誇らしく感じている。

問十四 ―― 線Ⅰ 「はっとした椰がぼくを見た。」、Ⅱ 「椰が力なく笑う。」、Ⅲ 「椰がまたうなずいた。」とありますが、この場面における椰の心情の変化を説明したものとして最も適当なものを次のア―エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 刀匠になりたいという夢をママに反対されていることを指摘^{ししてき}してきたあおばに腹を立てた。生半可な気持ちでは刀匠になれないと自分でも感じて夢をあきらめかけたものの、再びあおばに励^{はげ}まされて何とか気持ちを奮い立たせようとしている。

イ 刀匠になるのは生やさしいことではないとあおばに語った自分自身の言葉に傷ついてしまった。しかし、ママに反対されたことで夢をあきらめるのは悔^{くや}しく、いつか必ずママを見返してやるという反発心^{いた}を抱いている。

ウ あおばの指摘で刀匠になる夢をかなえるのは険しい道^{だて}のりであることを強く意識して気落ちした。しかし、たとえ誰^{だれ}から反対されたとしても自分の夢は変わらないということに気づき、あきらめずに夢をかなえようと決意している。

エ あおばの言葉によって、ママが反対するのももっともだと気づかされ、自分には刀匠になる資格がないのではないかと半ば絶望した。しかし、あおばと一緒に^{いっしょ}であれば夢をかなえられるはずだと何とか希望をつなげようとしている。

問十五 この文章の登場人物の説明としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア あおばは好奇心旺盛で自分の気持ちを素直に表現するところがあり、また、友だち思いで優しい一面も持っている。

イ 榎は感情が豊かで友達にははっきりと自己主張ができる一方、大人に対しては遠慮がちで質問もためらってしまうような繊細さを持っている。

ウ あおばのじいちゃんは物知りで愛情深く、興奮したあおばをたしなめるなど、落ち着きがあつて穏やかである。

エ 榎のママは職人としてのプロ意識は高いが、仕事の厳しさも身をもって感じており、娘が刀匠になることに反対している。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 社長がエイダンをく^ーだした。
- ② 旅先で名物料理をシヨウミ^ーする。
- ③ 仕事のノウリツ^ーを上げる。
- ④ ビジネスのサイカク^ーがある。
- ⑤ 言いワケ^ーをせずに正直に話す。

問二 次の①～④の――線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① ドラマの時代考証^ーを行う。
- ② 新しい技法^{ぎほう}を創始^ーする。
- ③ 姉のぬいものは針目^ーがそろっている。
- ④ 説明^ーを補う必要がある。

問三 後の①～③の言葉について、 Aにあてはまる漢字一字をそれぞれ入れ、反対の意味となる言葉^ーを完成させなさい。また、 Bにあてはまる漢字一字をそれぞれ入れ、 Aに漢字一字^ーを入れて作った言葉と似た意味となる言葉を完成させなさい。

例 結果

A	【答え】原
B	【答え】理

① 長所

A	所
B	点

② 退化

A	歩
B	上

③ 支出

A	入
B	得

問四 次の文は二つの意味にとることのできるあいまいな文です。二つの意味とはそれぞれどのような意味ですか。その意味の違いがはっきり分かるように例にならって書き直しなさい。（書き直すときに、他の言葉に置きかえたり、読点を加えたりしても構いません。）

例 私は妹に自分の部屋で勉強させた。

意味1 私は妹に私の部屋で勉強させた。

意味2 私は妹に妹の部屋で勉強させた。

先生は出かけていませんでした。

意味1…

意味2…

